工高タイムス
北海道旭川工業高等学校新聞局
〒078-8804
北海道旭川市緑が丘東4条1丁目1－1
発行人（局長）
佐々木　晃成
（電気科３年）

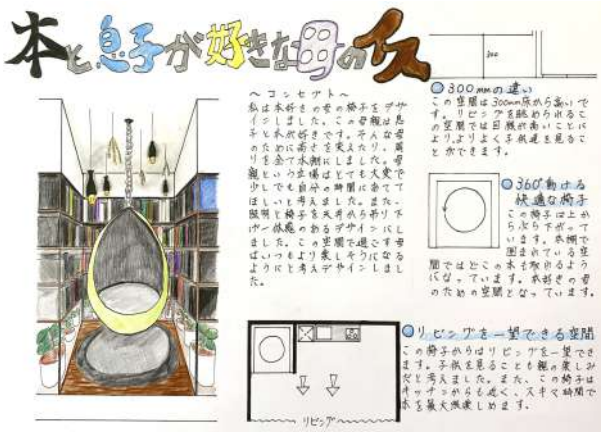
建築科コンペ

高校生インテリアデザインコンクール
橋本君 全国2位に
椅子を天井からつるす

橋本壮真君（建3）は建築科から3人が応募した星槎道都大学美術学部建築学科主催の第6回高校生インテリアデザインコンクールで全国2位の優秀賞を受賞した。全国から5校が参加し56作品の応募があった。

課題は「お母さんのための椅子からはじまるデザイン」。作品は9月から製作し始めて3～4週間で仕上げた。作品のタイトルは「本と息子が好きな母のイス」。少し高いところから息子たちを見ながら、母親が趣味の読書をできる椅子だ。

橋本君は「優秀賞を受賞できるとは思っていなかったので、とてもうれしかった。これから進学しようと思っている大学のコンペだったので応募を天井からつり下げるところで、自由に動けて好きな本を取ったり、くつろげたりできるようにしたところ。反省点は製作時間がかなり短く、色塗りを雑にしてしまったところ」と話した。



橋本君が作成したインテリアデザイン

優秀賞受賞の橋本君（建3）

建築科コンペ

工高生デザインコンクール
阿部君が入選 全国4位
キャンプ場と家を合体

入選した阿部君（建3）

阿部圭悟君（建3）は建築科から1人が応募した日本建築協会主催の第70回工高生デザインコンクールで全国4位に相当する入選を果たした。全国から8校が参加し95作品の応募があった。

課題は「私のまちの私たちのすまい」。作品は7～9月に製作し、夏休み中は週1回5時間、平日の放課後に2～3時間で仕上げた。作品のタイトルは『間継（かんけい）～人と人の間を継なぐすまい～』。キャンプ場と家を合体させた建物で、コロナ禍でたくさんの人の関係が離れてしまったので取り戻したいと思い、設計した。

阿部君は「日本建築協会主催で規模が大きいため応募した。工夫点は建物が大きく空気がこもってしまうため、足湯を建物の真ん中に設置したところ。足湯で空気を温めて循環するようにし、空調と暖房の役割を持つようにした。反省点は設計図がA1サイズのため書くのに時間がかかってしまったところ。デザインや時間配分をしっかり考えれば良かった」と話した。

国際理解の集い
多様な文化を知る
「聞く能力が上がった」

第23回高文連上川支部国際理解高校生の集いが11月6日に道の駅あさひかわの会議室で行われ、1年生から電気科2人と建築科1人が参加した。上川管内の英語に興味のある高校10校から高校生62人が集まった。ALT13人が参加し、ALT1人と参加者5人程度のグループを組み英語を使ったアクティビティを行った。

今宙陽君（電1）は「英語科の名波奈々女先生から集いの誘いがあり、良い機会だと思い参加した。ALTと話すことで、発音や出身国の文化を知ることができておもしろかった。参加者が多様で過去に外国へホームステイした生徒や英検を持っている生徒が多く英語力が高く、分からない単語もあったが、周りのサポートがあり楽しめた。緊張で頭の中が真っ白になったが、伝えたい単語を並べて話を続けることができた。今回の体験を通して、普段の英語の授業で発音を意識していきたいと思った。また、英検を受けるときに生かしたい。次回も参加したい」と話した。

高野拓磨君（建1）は「英語が得意な人とどれだけ自分の英語が通用するのかを試したくて参加した。ALTや留学生の英語は話すスピードが速く聞き取りが難しかった。しかし、その中で英語を聞く能力が上がり、意識してゆく中で英単語のイントネーションが分かった。普段からコミュニケーションを取ることが大事なので、授業の中でALTの方や先生方と英語で話したい。これから英語を話す機会が増えると思うが、今回の参加者のようにすらすらと話せるよう、来年も参加したい」と笑顔で語った。

ALTと話す高野君（建1）（左）
写真提供…名波奈々女先生

旭工ライフ

税金でつなぐバトン
旭川東税務署長賞を受賞
金子來未さん（化1）

チョコレートが好き

国税庁主催の「税に関する高校生の作文コンテスト」で旭川東税務署長賞を受賞した。11月11日に署長の野原誠さんが来校し校長室で表彰を受けた。まさか自分が受賞するとは思っていなかったのでうれしかった。

旭工では毎年「公共」の授業で夏休みの課題として1年生全員が税の作文を書いている。

作文のタイトルは「未来へつなぐバトン」。税金のほとんどは大人が納め、私たちは学校で学んでいる。それを繰り返し何世代にも渡りつないでいくバトンのように感じたから。

今私たちが受けている教育がこれからも続いていくように税金を使ってほしい。外国では紛争地帯、教師不足が原因で教育を受けられない国もあるので、当たり前ではないことを多くの人に知ってほしい。

作文は11月21～27日までイオンモール旭川の4階で展示している。

工具箱

私は新聞局の1年生1人と3年生3人で11月3日に知新小学校で上映された「102歳の言葉」という映画を見に行った。この映画は生活図画事件でただ一人生き残っている菱谷良一さんのドキュメンタリー映画だ▼生活図画事件とは、戦前の1941～42年に普段の生活をありのままに描く「生活図画」をしていた美術部の先生や学生が逮捕された事件だ。菱谷さんは旭川師範学校5年生のときに美術部で描いた絵が共産思想を表すものだという理由で、治安維持法違反容疑で同じ美術部の学生とともに逮捕された。獄中で拷問を受け無実の罪を着せられ、1年3か月もの間、警察署の留置所や刑務所で拘束された後、仮釈放となった▼私は1年生の11月に「北海道における治安維持法の被害を知る」という催しに参加し、初めて生活図画事件を知った。当時の自分はショックを受け、歴史を繰り返さないために若い世代にこの惨劇を伝えていきたいと感じた▼私は「102歳の言葉」を見て治安維持法の理不尽さ、思想統制の恐ろしさを忘れてはならないと改めて感じた。このような事件が繰り返されないために私たちができる行動は、選挙に関心を持つことだ。私も18歳になったら選挙でしっかり考えて投票したい▼卒業までの日数が残り3か月ほどになった。卒業してからも平和を考える催しに参加したり、読書をしたりして事実を知る努力をしていきたい。（十3北島）

新聞全道

制作技術を学ぶ
10年連続11回目の総合賞

新聞局の12人は10月2～4日に苫小牧市で行なわれた第68回全道高等学校新聞研究大会に参加した。大会には全道から43校生徒296人が参加し、新聞発行の意義や制作技術を学んだ。

他校の局員と討議する佐々木局長（右）

大会1日目は開会式の後、記念講演でワークショップデザインディスクライブウィズ代表高橋優介さんのSDGsとウェルビーイングについての講演を聞いた。2日目は8分科会に分かれ、他校生と交流しながら2テーマに沿った活動を行なった。3日目は全体会で各分科会で行なったことを代表が発表し、各分科会の内容を参加者で共有した。留萌高校新聞局局長の茶谷倖綺君（3年）が全国大会の報告を行なった。閉会式後に全道高校新聞コンクールの結果発表と表彰式が行なわれた。旭工新聞局は手書き・ワープロ部門で10年連続11回目の総合賞（最高賞）を受賞した。

佐々木晃成局長（電3）は「IA分科会に参加した。高校生新聞にできること、作る中で困難なこと、高校生新聞を発行する意義の3つのテーマについて話し合った。私は提言者としてテーマに対する自分の意見を発表した。自校新聞と他校新聞との違いや共通点を話し合えて楽しかった。この経験を今後の新聞制作につなげていく」と話した。また、総合賞を受賞した感想を「今年も受賞できてうれしい。今までの頑張りが評価され、達成感があった。受賞できたのは日頃から旭工生が取材に協力してくれたおかげ。後輩にはこれからも取材や記事作成をしっかりと行ない、一生懸命に新聞制作に取り組んでほしい」と語った。

全国高校新聞コンテスト
第482号が奨励賞

全国から83校が応募した全国高等学校新聞教育研究会主催の第1回全国高校新聞コンテストで工高タイムス第482号が奨励賞を受賞した。このコンテストは1校1号だけで審査されるもの。

記念講演

先が見えない時代
支えは「自分の願い」

記念講演では「わたしの将来との向き合い方～SDGs・ウェルビーイングと自身をつなげる～」と題して、ワークショップデザインディスクライブウィズ代表の高橋優介さんが講演した。高橋さんはワークショップやカードゲームの体験を通して、全国各地でSDGsの広報活動をしている。

SDGsは2015年に国連総会で採択された「持続可能な開発目標」で、世界を変えるための17の目標がある。高橋さんは「持続可能な開発とは、未来の私たちが幸せを感じられるような温かい社会のことを考えつつ、今の私たちの幸せも考えていくこと」と解説し、そのためには「経済・社会・環境の3要素が必要不可欠」と話した。「ウェルビーイングとは心身の健康だけではなく、満足した生活や幸福な状態など、社会的に良好な状態を維持していること」と語った。

講演の目的を話す高橋さん

ワークショップ「サルでも3問は正解している13問クイズ」では会場の生徒が2人1組となって解答。出題は環境や社会問題からで「世界の1歳児の中で、何らかの病気に対して予防接種を受けている子どもはどのくらいいるでしょう?」「A20%、B50%、C80%」（正解はC）や「これからの100年で、地球の平均気温はどうなるでしょう?」「A暖かくなる、B変わらない、C寒くなる」（正解はA）など3択で解答するものだ。

環境問題の海洋プラスチックは1年間で世界で800万tが流出している。分解されて5㎜以下のマイクロプラスチックになると魚の体内や飲料水などにも入り、1週間で日本人が摂取する量はnanakoカード1枚分になる。

高齢者が犬の散歩をすることで、街の見回りにもなり、運動不足の解消にもつながる。近所との世間話は災害時に協力し合える関係を築く。ゴミ拾いをすることで衛生面や住みやすさが増す。このような何気ない行動が長い時間をかけて自分に返ってきて、最終的にはSDGsにもつながるという。

高橋さんは「変化が続き先行きが見えない時代に私たちを支えてくれるのは『自分の願い』だ。これがあれば生きる上での楽しみを見つけられる」と語った。大谷翔平選手が高校生の時に目標を達成するために使ったバックキャスティングと呼ばれる「願いを言葉にし、ありたい未来の姿を実現するために何ができるか、逆算していく」考え方も紹介した。

IIC分科会

進む商店街の空洞化
魅力は接客力の高さ

IIC分科会では苫小牧駅前通商店街を取材し、5つの班に分かれ新聞を手書きで制作した。まず苫小牧駅前道商店街振興組合理事長の木村司さん（66歳）の説明を聞いた。その後、班ごとに分かれ商店街の店舗で取材をした。旭工からは竹内佑君（土2）と高橋健槙君（化2）が参加した。

理事長の木村さんは「苫小牧駅前通商店街は昭和46年頃にできた。かつては多くの客でにぎわっていて100店舗以上が並んでいた。しかし、郊外に大型ショッピングモールやホームセンターなどができ、中心地の空洞化が進み43店舗まで減った」という。そのため「各店舗から月々お金を集めて行なっていた大規模なイベントができなくなった。今では小規模なイベントすら難しく感じている」と語った。商店街の魅力を「コンビニエンスストアーのように商品の説明を詳しくしないのとは違って、店員が商品を詳しく説明するので、お客さんの選択肢の幅を広げ、考えながら購入ができる」と話した。

ヘリテージ・キムラ
人間性を大切に

竹内君は他校の5人と一緒に木村屋第一商事株式会社「ヘリテージ・キムラ」の店舗に行き、代表取締役の木村司さんに取材をした。店名ヘリテージは英語で遺産や伝承という意味があり、木村さんの父が「先祖代々で受け継いでほしい」との思いでつけた。

ヘリテージ・キムラは80年以上続く老舗の宝石店で、以前は支店が百貨店に入っていたこともあるが、現在は本店のみで営業している。従業員は最も多いときで12人、今まで従業員を解雇したことはない。基本的に定年退職で減っていき、現在は5人。お客さんは年齢の高い常連客が多く、たまに親子での来店がある。何度も来店してもらうには「人間性」が大切だと木村さんは話した。

ネクタイを勧める木村社長

日本で宝石は水晶しか取れないので、外国から宝石を取り寄せて、指輪やネックレスなどのアクセサリーを作って販売している。また時計と小物も販売し、時計の修理もしている。お勧めの商品は苫小牧市のゆるキャラ「とまチョップ」のネクタイでカラーは5色ある。

ベビー子供服 チルド
良い商品を提供

高橋君は班員6人でベビー子供服「チルド」の店舗に行き、斑目（まだらめ）康子社長に取材した。チルドの特徴は、入り口のドアが2つあることだ。1つは大人も子どもも通れる一般的なサイズの扉で、もう1つは110㎝の小さな扉だ。この小さな扉は子どもサイズに作られていて、扉を見て興味を持ってもらい、親と一緒に来店してもらうためだ。

チルドは1957年に康子さんの父が創業し、康子さんが2代目。「良い商品をお客さんに一貫して届ける」ことを心がけて商売をしている。店内は可愛らしいデザインで、多くの子ども服の他に木製玩具も販売している。チルドは檜（ひのき）を通して、子どもに新たな発見や学びをもたらす「木育」にも力を入れ、檜の木球がたくさん入ったプールで子どもたちが自由に遊べるようになっている。